

## 変なもの [その1] ー春の虫こぶ集合ー

### 1. ケヤキハフクロフシ

ケヤキの新葉の表側に餅が膨れたようなものができ、切ってみると中は空洞で、たくさんのアブラムシが入っています。ケヤキヒトスジワタムシといい、6月になると穴が開いて翅のある成虫が脱出します。袋はそのまま残りますが、やがて茶色になってしまいます。

脱出した虫は夏から秋までササの根際で吸汁して増殖し、寒風が吹く季節になると綿毛のついた有翅虫となってふわふわ飛び出し、「雪虫」といわれます。ケヤキにたどり着くと冬芽の横に産卵し、春の芽出しとともに孵化して葉に寄生することとなります。



### 2. イヌシデメフクレフシ



冬枯れのイヌシデの細い枝先に大きな蕾のように見えていたものが、新葉が伸び始めても少し緑が入って膨れただけで成長しません。そのためこの枝は伸びることなく枯れてしまいます。冬芽の鱗片の間にソロメフクレダニが多数寄生し、鱗片が異常肥大したものです。もともと新葉にある毛が長くなって白色がよく目立ちます。ソロとはシデの別名です。

### 3. エノキハトガリタマフシ

新葉が成長すると目立つようになりますが、5月末までになくなってしまいます。葉が硬くなる頃には落下してしまうのです。とんがり帽子はエノキハトガリタマバエの幼虫が1匹入っている袋です。落ちた袋の中のうじ虫は越冬し、翌年の発芽前に蛹化・羽化して芽の近くに産卵します。葉身だけでなく葉柄や新しく伸びた枝にでもフシが付きますが、葉が主です。



### 4. コナラメリンゴフシ



刈り込まれたりしたコナラの低木でよく見られます。枝先に少し赤く色付いた果実のような形で存在し、大きいものは直径3cm以上にもなります。越冬芽の部分がナラメリンゴタマバチの寄生によって膨れたものです。内部は果肉状で美味しそうですが、コナラのどんぐりと同じようにタンニンを多く含み渋くて食べられません。古くなると枯れ枝状になり、ハチの脱出口がたくさん開きます。

### 5. タブノキハウラウスフシ

葉にできる虫こぶとしては珍しく秋から春まで付いています。タブノキの常緑であることが可能にしている、タブウスフシタマバエの生活サイクルなのでしょう。中心がくぼんだ臼の形、くぼみの中には成虫が脱出するための蓋まで付き、中には黄色のうじ虫が1匹ずついます。新葉の展開時に列状に産卵することが多いようですが、写真のようなものもあります。1枚の葉に多数産卵していることは同じですが必ず葉の裏側です。

